

親となり感じたこと

飄

々

広報委員

岡山 智亮

私事ですが、昨年の11月に第一子となる娘が誕生しました。そろそろ1年が経ちますが、日々娘の成長に喜びを感じる生活を送っています。

私は普段、子供を診療することもあり、周りの人からは「子育ても安心ですね」と言われることが多いのですが、なかなかそうも言っていられないのです。なんととっても子育て自体は初めての経験で、“病気の子を診る”ことと“子育てをすること”とはわけが違うことをこの度、痛感することとなりました。勤務医の頃は小児科を中心に診療をしており、上司や医学書から乳児健診のポイントを学んできたつもりでした。しかし娘が生まれ、この1年子育てを実践していく中で、今まで学んできたことが通用しない場面に何度も遭遇しました。

娘は産まれてからなかなか母乳がスムーズに飲めない傾向にありました。なぜ飲めないのか、医師として診ても明らかな身体的な異常は見当たらず、生後2～3か月くらいまでは悩ましい生活を送っていました。その後少しずつ娘の哺乳ができるタイミングがつかめてきて、一時は体重の増加も緩かったのがしっかり増えてくるようになりました。では、哺乳できるタイミングがいつだったかということ、うとうと眠り始めたときだったのです。起きた状態では乳首も哺乳瓶も大泣きして嫌がり全く飲めないのが、寝かしつけると飲めるのです。乳児であれば、おなかがすいて泣けば授乳をするといった繰り返しだと思いますが、その傾向は娘には全く通じなかったのです。妻も泣いた子を授乳しておなかを満たしてあげるといった授乳をすることの醍醐味を味わいたかったと思います。ただ、わが家の場合は何とか寝かしつけて

落ち着いたところで授乳するといった流れになっているため、授乳までこぎつけるのに毎回1～2時間くらい要します。そのため生活は、授乳に追われる感じで過ごしています。ペースをつかんでからは体重の増加は順調なため、誰が見ても「大きくなったね」と声をかけてくれたり、「おなかが空けば飲めるはずだし足りているから飲まないのよ」とアドバイスを受けたりすることも多々ありました。私も、もし娘と同じような子が健診に来たとすると「体重も増えているし順調ですね」で終わってしまうかもしれません。それでもペースがつかめるまではいろいろな可能性を考え、悩み、試行錯誤しながら子育てをしてきました。それでも娘にはこのパターンでしかまともに飲ませることができませんでした。一日中娘と一緒にいる妻は辛いことも多かったと思います。このようなことは実際に毎日子育てをしなければなかなかわからなかったと思います。

最近インターネットにも子育てに関するサイトはたくさんあるようですが、それを見ることで逆に不安が増してしまうような内容もこの度、確認することができました。今までも親の訴えに耳を傾けるということを意識して診療をしてきたつもりでしたが、もう一度本当に親の心配が解決できるような説明を心がけるようにしたいと思います。また、せっかく子供の成長過程に関わることのできる仕事をしているので、特別な訴えがなかったとしても現時点に至ったその子の成長の過程まで意識した診療ができればと思うようになりました。今回、1年ばかり子育てを経験しましたが娘からはいろいろなことを学ばせてもらっています。